

Book Reviews ブックレビュー



私の「イチオシ収穫本」

米中関係の淵源に踏み込む 古参記者の掛け値なしの仕事

日 本人が米中関係を論じていると、時に三角形の頂点から斜辺を見下ろすような独善に陥りがちである。

だが、日米関係よりも長い歴史を持つ米中の交流には、私たちの目に見えていない部分が多に多いのではないかと。

米国の独立戦争に財政面で貢献した「建国の父」の一人、ロバート・モリスは初代財務長官への就任要請を断り、商人として対中貿易に乗り出した。1773年に起きた「ボストン茶会事件」のお茶は、中国産だったのだから、米中の経済交流は歴史が古いのだ。

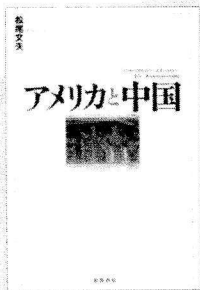
また、数多くの宣教師が米国から中国に渡り、学校や教会を造った。中でも、哲学者のジョン・デ

ューイが2年以上も中国に滞在し、毛沢東にプラグマティズムの影響を与えたという指摘に驚かされる。青年期の毛沢東は米国の在り方に一種の桃源郷を見ていたらしい。

米国の外交にありがちなことに、理想主義と現実主義が同居する形で中国との関係が拓かれていく。

19世紀にジョン・タイラー大統領が道光帝に送った書簡には、「太平洋だけが隔てる二つの偉大な国の友好関係」という言葉が見て取れる。逆に、中国にとつての米国は、従来の「朝貢冊封システム」と無縁のフロンティアであった。

ただし、米国は1840年のアヘン戦争では大英帝国の侵略の片棒を担ぎ、第2次世界大戦後は蒋介石を見捨てる。中国は、何度も米国に裏切られるのだ。米国は門戸開放、機会均等という建前を掲げつつ、最後は実利という本音を優先する。戦後の米中和解放は第一級の機会主義者たるリチャード・ニクソン大統領の登場に始まる。米中関係の歴史に脇役として登場する日本、つまり斜辺の先に見



『アメリカと中国』
松尾 文夫 著
(岩波書店/3000円)

【名著】 味読 再読

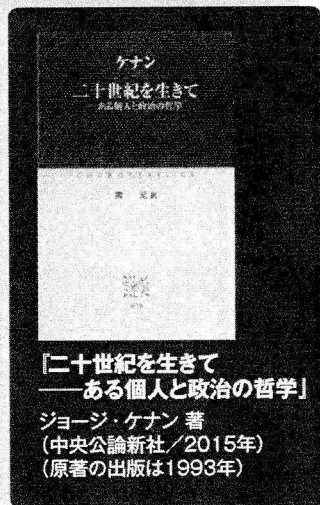
米国の美徳は幻想である

第一生命経済研究所特別顧問

松元 崇

冷戦時代に「ソ連封じ込め政策」を提言したジョージ・ケナンが、冷戦終結後の1993年に89歳で著した本。彼は、政治的・イデオロギー的なソ連の脅威への最善の対抗策は「我々自身の社会の健全さと活力」だとしていた。そこから水爆開発などに反対して米国外交の傍流へ追いやられた。

彼は、米国に他国より優れた美徳があるとするのは幻想だとして「正直に言って、我々はただの人間、(中略)人間のありふれた弱点をすべて抱えたものなのだ」「我々には大きな軍力がある——確かにある。だが(中略)個人、集団を問わず、何らの罪を伴わない力はない」という。今日、米国大統領が「アメリカ・ファースト」を唱える。21世紀を生きる知恵を考える際に参考になろう。



『二十世紀を生きて——ある個人と政治の哲学』
ジョージ・ケナン 著
(中央公論新社/2015年)
(原著の出版は1993年)

下ろされる頂点としての日本の姿が興味深い。そもそも日本が招待して歓迎したはずのデューイが、「五・四運動」を経て対日批判に転じた経緯にはドキリとさせられる。似たようなことは、今でも繰り返されているのではないかと。著者は、元共同通信の記者で幼年期を中国で過ごす。太平洋戦争

選・評
吉崎 達彦
双日総合研究所チーフエコノミスト

では、米軍の空襲を生き延びた。長らく、米国取材に携わり、「ニクソン訪中」を予言したことは有名だ。一度は引退するも、2003年のイラク戦争直後には「銃を持つ民主主義」を上梓している。04年、70歳のときに米中関係という新しいテーマに着手し、足かけ14年もの歳月を費やして本書を完成させた。現地取材は、米建国の地であるフィラデルフィアを皮切りに、毛沢東の生地とされる中国の長沙にも及んでいる。その精力的な仕事ぶりには、心から畏敬の念を抱かずにはいられない。